

「Lee, stay with me」

若松穂波

【あらすじ】

20XX年。世界は労働力の多くを、アンドロイドに依存していた。河野もも(48)と息子・音央^{ねお}(13)も、中古で購入した家庭用アンドロイド・リイと共に暮らしていた。穏やかな日々が続いていた折、突然リイの左腕が全く動かなくなる。不調の原因は寿命。しかし、製造元の機密保持を理由に、アンドロイドの修理は実質禁止状態。「修理する権利」すら奪われたももたちにできることは何もなかった。リイの余命宣告を受け、人生の大半をリイと過ごしてきた音央はショックを受ける。

一方、一家の大黒柱であるももは、家族の生活のため、悲しみに浸る間もなく、リイの代わりとなる新型廉価版アンドロイド・メイ^{メイ}の購入を決める。リイの喪失を前に、激しく衝突するももと音央。自分が二人の不和の原因であることに「家族の幸福を守る」という存在意義を見失いかけたリイは、メイトを完璧な自分の替わりにしようと決意する。

しかし、廉価版であるメイトは何をやらせてもうまくいかない。焦ったリイは、違法行為であるアンドロイドの改造に手を染めかけるが、ももの言葉によって思いとどまる。

一方、音央は修理業者を騙る佐竹（28）に出会う。過剰な資本主義社会の中、修理を禁じ、次々物を買わせ、金持ちだけが儲かる今の世は狂っている、自分ならリイを直せるという佐竹を信じ、もものに黙ってリイを連れ出す音央。しかし、佐竹の正体はアンドロイドを誘拐・不法改造する悪徳業者だった。騙された音央を庇いリイは佐竹の暴力に倒れる。

絶体絶命かと思われたその時、警察が到着。家を連れ出される直前、リイはメイトに、自分に何かあったら音央を守るよう指令を残していた。それは、かつてもがりイに託したものと同じ指令だった。リイを失った世界で、再び家族としてやり直そうとするももと音央。

大人になった音央は社会構造そのものを変えようと進学。新しい未来を模索し始める。

【人物関係表】

河野 もも (48) シングルマザー

河野 音央 (13) ももの息子

リイ 家庭用アンドロイド。外見は若い人間
メイト 同右。リイより新型・廉価版

佐竹 仁 (28) アンドロイドの不法改造業者

森 恵茉 (46) ももの同僚

ドクター (60) アンドロイド正規修理業者

警官 (58)

音央の友達 (20)

1 ○ 診療所・内

ドクター「となると、寿命でしょうね」

河野もも（48）と向かい合って座り直し、ドクター（60）が告げる。

診察台に目を瞑って横たわるリイは、20〜30代の中性的な見た目の若者。

しかし、ももは神妙な面持ちでその言葉を受け止める。

もも「そうですか」

ドクター、リイの体に触れる。

ドクター「こういうのは、大体先端からダメになるんです。まず手先、腕や足、ときて」

リイの頭のあたりを指す。

ドクター「最後はここが動かなくなる」

もも「……」

ドクター「気休めにしかないかもですが」

ドクター、机の脇にあった冊子を渡す。

『アンドロイドの看取り方』とある。

冊子を鞆にしまい、リイを再起動するもも。

もも「リイ、帰ろう」

リイの目が開き、ももを捉える。

タイトル『Lee, stay with me』

2〇 集合住宅（夕）

過密に建てられた団地。

あちこちに水道管などが露出している。

3〇 集合住宅・廊下（夕）

ももとリイが帰宅する。

4〇 河野家・居間（夕）

部屋の電気はついていない。

もも「（ホッとして）音央、まだ帰ってないね。

私このまま仕事行くから。あの子が帰って
きたらご飯お願い」

リイ「はい、ももさん。気をつけて」

ももが小さく手を振り、家を出ていく。

部屋に残されたリイは慣れた様子で、

散らかった室内を片付け始める。

その左腕は、ダラリと下がっている。

5 ○ 焼却施設・バックヤード（夜）

職場に到着したものに、作業服姿の同

僚・森恵菜（46）が近寄る。

恵菜「どうだった？」

首を横に振るもも。

恵菜「そっか……何年目だっけ」

もも「死んだ夫の保険金で買ったから……10

年、かな。その時も中古だったし」

ベンチに座り込むもも。

隣に座り、肩を寄せる恵菜。

恵菜「……つらいよね。アンドロイドって言

っても、家族みたいなものだもん」

恵菜の肩を借り、少しだけ泣くもも。

6 ○ 河野家・居間（夜）

台所で調理するリイ。

玄関が開く音がし、音央（13）が帰宅。

音央「ただいま！」

リイ「音央さん、お帰りなさい」

荷物も置かず、台所に直行する音央。

音央「腕、どうだった？ 直りそう？」

リイ「んー。まだ分かりません」

音央「そっか。早く直るといいけど」

リイ「ありがとうございます」

リイ、手元で調理し終わった揚げ物を
ひとつ摘み、音央の口元へ。

音央「えっ、ちよっ、あふ、あふっ」

リイ「美味しいですか？」

音央、モグモグしつつ、親指を立てる。
それを見て微笑むリイ。

× × × ×

食卓を囲む音央とリイ。

音央の前にだけ食事が並んでいる。
二人の手元のデバイスには、新型アン
ドロイドの **CM** が次々流れてくる。

音央「リイよりブス。リイよりバカそう」

困った様子のリイ。

リイ「音央さん、学校は楽しかったですか」

音央「んー？ 別に楽しくはないかな」

リイ「楽しくないんですか」

音央「勉強は面白いよ。でも、やったところで無駄っていうか。将来何が変わるのって感じだし」

7 ○ 焼却施設・内（夜）

作業服姿の momo が、焼却施設内部に溜まった灰の清掃を行なっている。

音央（声）「今の時代、人間にできる仕事なんて、アンドロイドが壊れちゃうような高温の場所とか、埃っぽいところの作業くらいでしょ」

防護服を覆うガラスがすぐに曇る。

汗だくのもも。

音央（声）「その仕事すら、母さんみたいに他の人と奪い合ってるわけだし」

8 ○ 河野家・居間（夜）

音央「母さんを馬鹿にする訳じゃないよ。すごい頑張ってるの、知ってるし。でも……俺もそうなるのかー、とは時々思う」

最後の揚げ物を口に放り込む音央。

リイ「……音央さんは、将来やってみたいこととかはないですか？」

音央「（投げやりに笑い）義務教育より先は贅沢品だって言われてるのに、そんなの考えるだけ悲しいじゃん」

ごちそうさまでしたと言い、席を立つ音央。

9〇 焼却施設・バックヤード（夜）

私服に着替え、帰り支度を整えるもも。手元の給与明細を見て、渋い顔。

10〇 路上（夜）

寒空の下を並んで歩くももと恵菜。もも「最初は左の親指だったの」

110 回想／河野家・居間

掃除中、手を止めて、左手を開けたり
閉じたりするリイ。

親指だけが痙攣している。

もも（声）「それが段々、他の指にも広がって」

× × × ×

床に皿が落ち、料理が飛び散る。

右手にだけ皿を持ったリイ。

左手が、だらんと下がっている。

もも（声）「昨日ついに、左腕が全く動かなくな
った」

食卓のももと音央。

もも、ハッと音央に目を向ける。

怯えたような顔でリイを見つめる音央。

120 回想戻り／路上（夜）

もも「買った店もだいぶ前に倒産したみたい
で連絡取れないし。保証期間も切れてるし、
パーツもないし。ドクターもあれじゃ、も
う打つ手なし」

恵菜「自分で修理……みたいな人も昔なら
ちよつとはいたけど。さすがに無理か」

もも「無理だし。今それ違法だし」

恵菜「違法なの」

もも「違法。人間でもアンドロイドでも、認
定を受けてないのに中身いじっちゃいけな
いらしい」

恵菜「なんで？」

もも「製造元の機密保持だって」

恵菜「そんなんうちら関係ないじゃん」

もも「でも、そういうものなんだよ」

恵菜「えー、知らないうちに、修理する権利
すらなくなってたってことか」

もも「貧乏暇なし、ついでに権利もなし」

もも、足元の小石を蹴飛ばす。

恵菜「てか、音央くんどうするの。まだ16な
ら、ももが外で働いてる間、もう一人保護
者必要でしょ」

もも「それなんだよねー。16才未満には保護
者二人って……これ決めた奴に私の生活な

んか一生わかんないよ」

恵菜「（冗談ぽく）嫌な法律、嫌な人生」

もも「やだやだ。あー、やだやだ」

恵菜「（空に向かって）やだー！」

もも「（真似して）やだー！ 誰か助けてー！」

笑いながら歩いていく二人。

130 河野家・音央の部屋（夜）

音央が机に向かって勉強している。

居間からガタン！と音がする。

140 河野家・居間（夜）

慌てて部屋から出てくる音央。

リイが転倒している。

あたりには、棚から落ちた荷物が散乱。

駆け寄り、リイを助け起こす音央。

音央「リイ！ 大丈夫？」

リイ「すみません。バランスが取れなくて」

音央「いいよ。座ってて、俺がやるから」

リイ「ですが……」

音央「いいから！」

なかば強制的にリイを座らせ、リイが
落とした荷物を回収する音央。

音央「無理しなくて良いから」

リイ「ですが、私は仕事を、」

音央「（振返り）だから、これ以上……！」

その時。玄関からももが帰宅。

もも「ただいま」

何も言わず、ももを見つめる音央。

もも「（一呼吸して）音央、少し話せる？」

× × × ×

食卓を囲んで向かい合うももと音央。

リイは充電ポッドに格納されている。

俯いている音央。

音央「……あと、どれくらいなの」

もも「ドクターが言うには、1ヶ月か、もう

少し短いか。わからない」

診療所でもらったパンフレットを音央

へ差し出すもも。

もも「ゆっくりで良いから。リイがいなくな

った後のことも考えよう」

『看取り』の文字に身を固くする音央。

もも「私もまだ働かなくちゃいけないし、音央にもこれからがある。だからね……」

小声で何かを呟く音央。

もも「え？」

音央「……いやだ、いやだ、いやだ！」

パンフレットを手で払い飛ばし、椅子を倒す勢いで立ち上がる音央。

そのまま自室へ駆け込み鍵をかけた。

もも「音央」

扉の前まで近寄るもも。

何か言いかけるが、部屋の中からは啜り泣く音央の声が聞こえる。

もも「……」

扉にもたれかかるもも。

窓から見える電光掲示板には、新型・廉価版のアンドロイド『メイト』の広告が爛々と光っている。

もも「（広告を見て）……」

充電中のリイに近づくもも。

眠るようなリイの顔を優しく撫でる。

もも「……リイ、許してくれる？」

充電中のリイは何も反応しない。

15〇 音央の中学校（翌朝）

ざわざわと話し声が飛び交う教室。

一席だけ、窓際に空席がある。

16〇 路上

音央が、リイを連れて歩いている。

音央「リイ、見て。あそこ、猫がいる」

リイ「音央さん、学校に行かないと」

音央「（聞こえないふりをして）あ、もう1匹いた。ほら！」

リイ「ももさんが心配しますよ」

音央「……俺のデバイス、GPS いじってるから、バレないよ」

リイ「そういうことではなくて」

音央「それに、何日か学校サボったところで

俺の人生、もう終わってんだから」

リイ「そんなことないですよ」

音央「そんなことあるんだって！」

立ち止まり、振り向く音央。

音央「リイがいなくなったら、母さんは俺を一人にして働きには出られない。人間が在宅で出来る仕事なんかたかが知れてるから、しばらくは生活するだけで手一杯で、高校の学費なんか到底貯められない。いま俺が学校行ったところで結局無駄なんだよ」

リイ「(項垂れ) ……申し訳ありません」

ハッと傷ついた表情になる音央。

音央「違う、違う違うそうじゃなくて。責めてるんじゃない。ごめん、リイ。違う」

リイ「……？」

音央「もともと無理だったんだよ、うちは。何もかも。リイがいてくれたから、できるかもって勘違いしてただけで」

リイの服の裾を掴む音央。

音央「……どうせ何も変わらないなら、今は

リイといたい」

リイ「……」

170 焼却施設・バックヤード

もものいるところに、恵菜が顔をだす。

恵菜「音央くん、大丈夫だった？」

もも、苦笑いで首を振る。

恵菜「そうだね」

もも「こればかりはね。でも、予想してた通りだったから、大丈夫」

恵菜「（言いづらそうに）替わり、見つかった？」

もも「……（小さく頷く）」

恵菜「そつか。（ももの肩を叩いて）音央くんも、いつか分かってくれるよ」

もも「だといんだけど」

もものデバイスに『まもなく配達！』
という賑やかな通知が届く。

180 路上（夕）

音央とリイが歩いている。

リイ「音央さん、そろそろ帰りましょう」

音央が、意を決したように尋ねる。

音央「……リイはさ、死ぬの、怖い？」

リイ「（少し考えて）わかりません。死んだことがないので」

音央「それは、俺だってないよ」

リイ「それに、アンドロイドは何かを怖がるようにはできていません。でも……」

音央「でも？」

リイの歩調が音央より遅れ始める。

リイ「少し残念ではあります。音央さんが大人になるまで側にいられないのは」

音央「……ずるいよ。俺ばかり悲しくて」

横にリイがいないことに気づく音央。

振り返ると、リイが片足を引きずって

いる。

駆け寄る音央。

音央「リイ、足が」

リイ「すみません。動かなくて」

音央「どうしよう」

太陽は、今にも沈みそうに傾いている。
辺りを見回す音央。

薄暗い路地には、助けてくれそうな人
は見当たらない。

その時。一台の車が徐行し、二人に近
づいてくる。

運転席の窓が開き、佐竹（28）が顔を
覗かせる。

佐竹「どうした、どうした。大丈夫？」

咄嗟にリイを庇う姿勢になる音央。

リイの足に目を止める佐竹。

佐竹「あー。足やっちゃったのか、その子」

音央「……だったらなんですか」

佐竹「いやいや、そんな（笑って）傷つくな

ー、人を悪人みたいに」

佐竹、鞆を漁り、名刺を取り出す。

佐竹「はい」

名刺を受け取る音央。

そこには「アンドロイド修理・販売」
と書かれている。

音央「修理……」

佐竹「（にっこり笑い）見たところ、出先でアシンドロイドが故障しちゃって、二人揃って家帰れなくて困ってる感じ？」

佐竹、再び鞆を漁るとお札を取り出す。

音央「（驚き）え、もらえませんか。こんなの」

佐竹「いいの、いいの。本当なら家まで送ってあげたいとこだけど、子供が知らない人の車なんか乗らない方がいいからね。これでタクシーでも呼んで帰りな」

佐竹、音央にお札を押し付ける。

佐竹「俺もこの仕事してるからわかるけど、アシンドロイドって家族みたいなもんでしょ？ちゃんと連れて帰ってあげて」

佐竹、ぐっと身を乗り出し、音央に顔を近づける。

佐竹「そんで、もし修理に興味あったら、その子、今度俺んとこ連れておいでよ」

それじゃ、と言って佐竹は車で去る。

路上に残される音央とリイ。

190 河野家・居間（夜）

リーの体を支えつつ、音央たちが帰宅。
家の明かりがついている。

部屋の中には、ももと、開封されたばかりの新型アンドロイド・メイドの姿があつた。

固まる音央。

音央「……なんだよ。それ」

もも、帰宅した音央に気づき、キッと振り返る。

もも「音央。あんた今日学校サボったでしょ」

音央にずんずんと迫るもも。

もも「さっき学校から連絡あつたよ。今日どうしたんだって。リーまで連れ出して。何してたの。ねえ、どこ行ってたの」

音央の視線はももを捉えていない。

ももの奥にいる、電源の入っていない、メイドだけを見ている。

もも「ちよっと。聞いてるんだけど。どこ行

つてたの」

音央「（被せるように）そんなの今どうだっていいだろ！！」

音央の大声にビクツとなるもも。

音央「それより、なんだよソイツ。ふざけんなよ！！」

リイ「音央さん。落ち着いて」

制止するリイを振り解き、ももに詰め

寄る音央。

音央「説明しろって。なんだよソイツ」

もも「昨日言おうと思ったのに、あんたが勝手に部屋に行っちゃったんじゃないの」

音央「は？ 昨日もうリイの代わり買うつもりだったのかよ」

もも「仕方ないでしょ。外に働きに出られないんじゃない、この先とても生活していけない。

それに、あんたの学費だっけどうするの」

音央「リイの代わりを買うくらいなら、外に働きに出なくなっちゃっていいよ！ 俺だって高校なんか行かなくていい！」

もも、机をバンと叩く。

もも「いい加減にして！」

大きな音に固まる音央。

もも「私が悲しんでないとも思った？　どんな思いで過ごしてると思う？」

音央「……」

もも「全部あんたのためじゃない。あんたが将来こんな生活続けなくていいように……」

音央「……うるせーよ」

もも「！」

音央「うるせーんだよ！　俺のため俺のためって！　ほとんど家にもいなくせに！」

もも「あんた本当にいい加減にしないよ」

音央「リイの代わりなんか考えられない。俺にとっては母さんより、リイの方がよっぽど家族だったんだよ！」

音央、ももを突き飛ばしてしまう。

ももが床に倒れる。

もも「痛ッ……」

もも、挫いた足首を抑える。

音央、倒れたももを見て、ハッと我に
帰る。

ももを助け起こそうとするリイ。

リイ「ももさん、大丈夫ですか」

音央「……ッ」

音央、一人外に飛び出す。

もも「音央！」

大きな音を立てて扉が閉まる。

20〇 集合住宅・前（夜）

走って息切れしている音央。

ポケットをまさぐると、先ほどのタク

シーのお釣りと、佐竹の名刺。

「修理」と書かれた文字を見る音央。

音央「……」

夜の街へ走り出す音央。

21〇 河野家・居間（夜）

床にへたりこんだままのもも。

× × × ×

（回想フラッシュ）

音央「俺にとっては母さんより、リイの方が
よっぽど家族だったんだよ！」

× × × ×

リイが足を引き摺りながら、救急箱を
持ってくる。

もも「（呆然と）……」

リイ「ももさん、こちらに」

ももの手を取り、優しく椅子に座らせ
るリイ。

思わず涙が溢れるもも。

リイ「痛みますか？」

リイが足に触ると、ももが顔を痛そう
に顔を顰める。

もも「そろそろ仕事、行かなきゃ……」

リイ「怪我をしています。休めませんか」

もも「あれ買っちゃったから……」

メイトを指差すもも。

リイ「そうですか。では処置だけでも」

床に座り、ももの足を自分の膝の上に

乗せて手当てするリイ。

「夢はひそかに」を小声で歌いながら、
右手だけでゆっくりと処置を行う。

もも「……」

220 回想／河野家・居間

10年前。眠る音央（3）を見ているも

も（38）とリイ。

ももが小さく歌っていた「夢はひそかに」が、ふと止まる。

もも「かわいいでしょ」

リイ「はい。とっても」

もも「……リイ。私、いますごく怖いのに」

リイ「怖い？」

もも「……この子の父親が死んで、もしいま
私まで死んだりしたら、この子ひとりぼっ
ちになっちゃう」

もも、音央の頬をつつく。

もも「うちに来たばかりのあなたにこんなこ
と頼むのは荷が重いかもしれないけど」

リイ、じつとももの言葉を待つ。

もも「もし。もしね、私が事故に遭ったり、急に倒れたり、もし私に何かあったら……」

230 回想戻り／河野家・居間（夜）

リイ「ももさん、終わりましたよ」

もも「（ハッとして）……ありがとう」

リイ、救急箱を片付ける。

リイ「ごめんなさい、ももさん。私のせいで怪我をさせてしまいました」

もも「……リイ。それは、違うよ」

リイ「私が、お二人に辛い思いをさせています。これは、存在意義に反することです」

もも「違うよリイ」

もも、床に座り、リイを抱きしめる。

もも「ただ、私たち、あなたがいなくなったら、どうすればいいか、まだわからないの」

リイ「ももさん……」

リイ、ももの背に手を回し、子供をあやすように軽く叩く。

リイ「決してご不便のないようにしますから」

ももの肩越しに、リイの視線はメイト
を捉えている。

× × × ×

ももが足を引き摺りながら、家を出る。

もも「音央、帰ってくるかもしれないから、

ここで待っていてくれる？」

リイ「はい。ももさんも、気をつけて」

ドアが閉まる。

暗い部屋で向き合うリイとメイト。

リイ、メイトの電源ボタンを押す。

メイトの目が開く。

メイト「初めまして。私はメイト。あなたの
生活のパートナーです。あなたのお名前を
教えてください」

メイトをじっくり眺めるリイ。

リイ「初めましてメイト。私はリイ。残念な
がら、あなたの生活のパートナーではあり
ません」

リイ、メイトの顔を両手で掴む。

リイ「あなたには、私になってもらいいます」

24〇 佐竹の事務所・前（朝）

工場のような建物に車が止まる。

佐竹が降りてくる。

佐竹「ありや？」

事務所の前で音央が丸まって寝ている。
手には、佐竹の名刺。

25〇 佐竹の事務所・内（朝）

殺風景な部屋。

佐竹が音央を招き入れる。

佐竹「好きなとこ座っててー」

恐る恐るソファに腰掛ける音央。

部屋の奥にある扉に目に止める。

他の扉に比べ、不必要なまでに厳重に

施錠された扉。

その奥から、微かに物音がする。

音央「……？」

音央が立ち上がり、扉に近づこうとし

た時、給湯スペースから佐竹の香気な
声が飛んでくる。

佐竹（声）「あ、お茶ないや。コーヒーでいい？」

× × × ×

湯気が上るコーヒーが2杯。

向かいのソファに座り、にこにこ音

央を見ている佐竹。

佐竹「家、飛び出てきちゃったか」

音央「……はい」

佐竹「まあ、でもちよつと酷いよねー。家族
同然の存在だったのに、そんなにあっさり
替わりを用意するなんて」

佐竹、音央を覗き込むように尋ねる。

佐竹「ドクターからはなんて言われてるの？」

音央「……パーツもないし、保証も切れてる
から難しいだろうって」

佐竹「そっかそっか」。でも、俺の見立てだ
と、あのくらいの故障なら全然直せると思
うけどなー」

音央、パツと顔を上げる。

音央「ほんとですか……！」

佐竹「本当、本当。公認ドクターなんて大概マニユアル通りにやってるだけだからね。製造元の指示で、すぐ廃棄にしたがるの」

音央「廃棄しなくてもいい……？」

佐竹「うーん。まあ、完璧に元通りとはいかないかもだけど……。うん、廃棄はしなくていいと思う」

音央「よかった……！」

喜ぶ音央を見て、微笑む佐竹。

佐竹「俺もねー、壊れかけの子、いっぱい見てきたから。どの子もちゃんと手入れすればまだまだ動けるのに、ポンポン捨てられてく。ひどい話だよ」

佐竹、コーヒーを一口啜る。

佐竹「音央くんは、まだ意識があるのに解体される時のアンドロイド、見たことある？」

音央「……（首を横に振る）」

佐竹「あれは……悲惨なんてもんじゃないよ。

『お母さん』なんていう子もいた。どこ

かの夫婦が、自分たちの子供として扱って
いたんだろうね」

音央「……そんな、ひどい」

佐竹「でも、君のところも一歩間違えばそう
なるところだったかもよ。よかったね」

佐竹、にっこりと笑いかける。

佐竹「今の世の中はね、こう言っちゃ悪いけ
ど狂ってるんだよ」

音央「狂ってる？」

佐竹「直したらまだ使えるものを、わざと修
理できないようにして、新しいものに次々
買い替えさせて。俺たちみたいな貧乏人か
ら金を巻き上げる」

佐竹、急に真顔になり、声色が変わる。

佐竹「そうやって自分の懷を肥やしてるクズ
がうじゃうじゃいるんだよ」

佐竹、音央の目を覗き込む。

佐竹「許せないよなあ、そんなの」

音央「……（圧倒され黙る）」

佐竹、急に元の笑顔に戻る。

佐竹「連れておいでよ、あの子。俺が直してあげるからさ」

音央「でも、俺、お金なくて」

佐竹「困った時はお互い様。その代わり」

佐竹、音央の隣に腰を下ろし肩を組む。

佐竹「無料^{ただ}でやる分、みんなには秘密で頼むよ。先生にも、友達にも、お母さんにもね」

260 路上（朝）

走って帰宅する音央。

× × × ×

（回想フラッシュ）

音央を外まで見送る佐竹。

佐竹（声）「また夜においで。次来るまでは、学校行ったり、いつも通りに過ごしなね」

× × × ×

息を切らせ、嬉しくてたまらないという顔の音央。

270 佐竹事務所・内（朝）

冷め切ったコーヒーが置かれている。

ソファにふんぞりかえり電話する佐竹。

佐竹「あ、もしもし？ 俺ですー。いやー

ご無沙汰です！ あのですね、今晚あたり

久々に旧型が手に入りそうなんですよ。あ

ー良かったです。喜んでもらえて」

280 河野家・居間（朝）

メイトに引き継ぎを試みるリイ。

互いの手を重ねて同期しようとするが、

うまくいかない。

メイト「こちらのバージョンとは引き継ぎの

互換性がありません。お手数ですが、手動

での作業をお試してください」

リイ「……」

夜勤明けのももが帰宅する。

リイ「ももさん、おかえりなさい」

もも「ただいま。音央帰ってきた？」

リイ、首を横に振る。

もも「困ったな。警察……」

ももがデバイスに手を伸ばす。

同じタイミングで、玄関が開き、

音央が駆け込んでくる。

音央「（興奮した様子で）リイ！」

音央、ももが家にいるのに気がつく。

みるみる表情を曇らせ、そのまま自分

の部屋に行ってしまう。

もも「音央、ちょっと待ちなさい」

音央「……（無視）」

もも「音央！」

音央「学校、遅刻するから」

音央、学校道具をつかむと、ももと目を合わさず、そのまま家を出てしまう。

もも、音央を見送り、ため息。

リイ、温かいお茶をももに差し出す。

リイ「どうぞ」

もも「……ありがとう」

リイ、メイトをチラリと見る。

メイトは、ただニコニコと突っ立っている。

× × × ×

もも「私、ちよつと寝るから。メイドへの引き継ぎ、お願いね」

リイ「はい。おやすみなさい」

リイ、ももを寢室に見送ると、メイドの方を振り返る。

リイ「ももさんがお休みになる時は『おやすみなさい』とお声がけしてください」

メイド「かしこまりました」

× × × ×

台所の掃除をメイドに教えるリイ。

流しを掃除しようとするメイドの腕を掴んで制止するリイ。

リイ「違います。右側の洗剤から使ってください」

メイド「かしこまりました」

メイド、また左側の洗剤に手を伸ばす。

リイ「違います。右側の洗剤です」

メイド「かしこまりました」

× × × ×

料理の下拵えをするメイドとリイ。

リイ「この食材を使って、このレシピで作ります」

メイド「申し訳ありません。揚げ物の調理は現在インストールされているサービスではご利用いただけません。有料サービスに登録されますか？」

驚いた顔でメイドを見るリイ。

リイ「今、なんて？」

メイド「申し訳ありません。こちらのメニューは現在インストールされているサービスでは……」

リイ「わかりました。メニューを変えます」

リイ、不安そうな顔で調理を続ける。

× × ×

洗濯物を畳むメイド。

そのやり方を監督するリイ。

リイ「違います。それでは、この家の収納に入れません」

メイド「短い広告をお楽しみいただければ、

24時間指定の畳み方を実施します」

リイ、渋々広告をオンにする。

メイト「(朗々と)車が高く売れるかお悩みで
すか？ それなら……」

リイ、食卓の上に出しっぱなしの、
もものデバイスに気が付く。

× × × ×

(回想フラッシュ)

リイ、メイトの顔を両手で掴む。

リイ「あなたには、私になってもらいます」

× × × ×

少し考え、デバイスを手に取るリイ。

検索ブラウザを開き、『アンドロイド
データ移植』と検索する。

人間には不可能な猛スピードで次々と
ブラウザを開閉しながら、情報を探す
リイ。

あるサイトでパッと手が止まる。

それは掲示板のようなサイト。

リイ「旧型のメモリを、移植、すれば、記憶

や動作など、そのままの挙動で運用、可能、ただし」

素早く動いていたリイの目が止まる。

リイ「違法」

リイ、目を閉じ、少し静止してから、
ゆっくり目を開ける。

リイ「でも、できる」

別ブラウザを立ち上げ、「アンドロイド
犯罪行為 持ち主」と検索する。

『アンドロイドの起こした事件で持ち
主逮捕！』『監督責任問われる』などの
見出しが出てくる。

一通り目を通した後、デバイスの履歴
を消去し、メイトの方を振り向くリイ。
自身に備わっている録画機能をオンに。

リイ「これから行うことは、すべて私が単独
で判断しました。ももさん、音央さんに指
示されたことはありません」

洗濯物を畳むメイトの後ろ姿。

道具棚からハサミを手に取り、メイト

にゆつくりと近づくりイ。

ハサミを振り翳しかけたその時。

もも「リイ？」

寝室から、寝起きのももが現れる。

咄嗟にハサミを隠すリイ。

リイ「おはようございます。ももさん」

メイトも洗濯物を畳む手を止め、ももの方を見る。

メイト「おはようございます。ももさん」

もも「おはよう。引き継ぎはどう？」

リイ「（につこりと）ええ。順調ですよ」

もも「（からかうように）……本当に？」

もも、メイトの畳んだ靴下を手取る。

黒と紺の靴下が組み合わさっている。

リイが「あっ」と声をあげ、メイトの

畳んだ靴下を見る。

すべてがチグハグの組み合わせ。

リイ「……（がっかり）」

もも「ふふ。まだまだ大変そうだね」

リイ「申し訳ありません……」

もも「謝ることじゃないよ。リイもそうだったなあって。懐かしい」

リイ「？」

もも「覚えてないの？　アンドロイドなのに都合いいんだから」

もも、メイトの横に座り、一緒に洗濯物を畳み始める。

もも「それじゃうちの収納入らないよって何度言っても、規定のやり方に戻っちゃうから、毎回教えてさ」

290 回想／河野家・居間

10年前。もも(38)が床に座り、リイに畳み方を教えている。

リイ、素早く畳むが、出来上がりはもものお手本と微妙に違っている。

300 回想戻り／河野家・居間

もも「何やらせても下手だったから、最初は『もー！』ってなったけど。今思うとそれ

も懐かしいな」

リイ、ハサミを元の場所に置くと、

メイトとももの横に腰を下ろし、洗濯物を畳み始める。

もも「音央もさ、私が家にいないからリイにばっかり懐いちゃって。リイがきて3ヶ月目には『ママ嫌〜！』って」

リイ「そうでしたっけ」

もも「そうだよ。忘れらんないよ！（笑う）」

リイ「……（困ったように笑い返す）」

もも「あの頃も、今みたいだったな。あの人が死んで、リイが家に来て。どうしたらいいか分からなくて。生活のためとはいえ、アンドロイドに子供任せっぱなしでいいのかなとか、このままで大丈夫なのかなってずっと考えてた」

リイ「……」

もも「でも、音央は元気に育った。クラスで一番勉強もできて、家族思いで。時々生意気で心配だけど、すごく、すご〜く良い子

に育った、と私は思ってる」

もも、畳んだ洗濯物を山に重ねると、

リーの手を握る。

もも「リー、ありがとう。ずっと私たちのそばにいてくれて。家族でいてくれて」

ももの背後にいるメイドが、最後の洗濯物を丁寧に畳んで重ねた。

リーが教えた畳み方ができている。

それを見て、リーの肩の力が抜ける。

リー「……こちらこそ。私を家族にしてください。さっでありがとうございました」

リー、右手をももの手に重ねる。

リー「皆さんは、きっと大丈夫です」

静かに微笑むもも。

もものデバイスのアラームが鳴る。

もも「やだ、そろそろ行かなきゃ。メイドをよろしくね」

目尻の涙を拭い、立ち上がるもも。

もも「リー大好き」

もも、仕事用カバンを掴み、出かける。

メイト「ももさん、行ってらっしゃい」

何も言わず、穏やかな顔でももを見送るリイ。

310 音央の中学校（夕）

下校のチャイムと共に、教室から飛び出す音央。

320 路上（夕）

息を切らせて、家へと走る音央。
ももが乗ったバスとすれ違う。
互いに気づかない。

330 河野家・居間（夜）

音央が勢いよく帰宅する。

メイト「音央さん、お帰りなさい」

音央「リイ！」

音央、メイトを押しわけ、リイの元へ。

音央「リイ、一緒に来て。早く」

リイ「音央さん。引っ張らないで」

音央「リイを直せるって人がいるんだ。その人のところ行って直してもらおう」

リイ「いいえ、もうその必要はありません」

音央「必要あるよ！　ドクターなんか、マニュアル通りにやってるだけなんだから。本当は直せるのに、わざと廃棄させて、（メイトを指差し）ああやって新しい商品買わせるためにやってるんだって。全部金儲けのためなんだって」

リイ「（首を横に振り）音央さん、いけません。」

ももさんもこんなこと望んでいません」

音央「俺は望んでるの！　リイは俺のアンドロイドでしょ？　ねえ、お願い」

リイを無理やり連れ出そうとする音央。

抵抗するも、片足と左腕が不自由なた

め、音央に抗えないリイ。

リイ「メイト」

リイがメイトに右腕を伸ばす。

手を繋ぐリイとメイト。

リイからメイトに、何かのデータが転

送される。

リイ「……お願いします」

玄関の扉が閉まり、音央とリイは行つてしまった。

部屋の中に取り残されるメイト。

34〇 佐竹の事務所・前（夜）

タクシーが去っていく。

音央、リイを半ば引きずるように事務所へ連れて行く。

リイ「音央さん。帰りましょう」

音央「帰らない」

音央、扉を叩く。

佐竹の「はい」という呑気な声。

しばらくして、扉が開く。

佐竹「（笑顔で）いらっしゃーい」

35〇 佐竹の事務所・内（夜）

音央とリイを招き入れる佐竹。

佐竹「じゃあ、早速こっち来てもらおうかな」

部屋の奥にある、「あの扉」の方へ二人を誘導する佐竹。
扉の奥は真っ暗。

36〇 佐竹の事務所・奥の部屋（夜）

恐る恐る部屋に入る音央とリイ。
不意に扉が閉まり、電気がつく。

音央「！」

部屋の中には、夥しい数のペット用ケージが並んでいた。

その中に詰め込まれていたのは、大量のアンドロイドたち。

どの個体も充電が切れ、ぐったりとした様子。

ケージの反対側には、アンドロイドの足や手、顔などのパーツのみがぶら下げられている。

音央「……ッ（口元を抑える）」

思わずかがみ込む音央。

リイ「音央さん！」

風を切る音と共に、固いもの同士がぶつかる鈍い打撃音が響き渡る。

音央の前に倒れるリイ。

音央「リイ……？　リイ！！」

音央が振り向くと、佐竹が鉄パイプ振り下ろしている。

佐竹「おい。急に動くなよ。間違えて旧型叩いちやったじゃん」

音央「お前……」

佐竹「（急に真顔になり）誰が『お前』だって？　偉そうな口きいてんじゃねーぞ」

音央「……！！」

佐竹「（笑顔になって）うつそー。冗談！」
音央、立ちあがって逃げようとするが
足がすくんで動けない。

佐竹「（音央を見て）ちょっと大人しくしておいてもらおうと思ったけど、もう十分か」
音央「これ、なんなんだよ。お前、修理業者じゃないのかよ」

佐竹「失礼だな。れっきとした修理業者で

すよゝ」

ケージを鉄パイプで撫でるように歩きながら近づいてくる佐竹。

佐竹「あちこちで捨てられそうになってた子達を拾ってきて、ちょーつと中身いじって、色んなところに行ってらっしゃーいってするのが俺の仕事」

音央「いろんなところ……？」

佐竹「そ。(にっこりと)お前みたいなおチビが知らない方がいいようなところにね」

音央たちの前にしゃがみ、リイに手を伸ばす佐竹。

音央「おい触るな！」

佐竹「(舌打ち)うるせーな」

音央の横面を張る佐竹。

唐突な痛みにうずくまる音央。

リイの髪を掴み、持ち上げる佐竹。

佐竹「この子はね、俺たちが言うところの旧型ってやつなの。新型と違って妙に人間っぽい顔してるでしょ」

リイの頬をペチペチ叩く佐竹。

佐竹「新型は量産型だからさー、この味が出ないのよ、味が。しかも、旧型っていま生きている数も少ないから、俺のお客さんたちにも大人気なわけ。わかる？」

音央「……触るなって！」

佐竹「もう、元気良いんだから」

佐竹、どさつとリイを床に落とす。

佐竹「あんまり騒ぐと、うっかりお前のことも殺しちゃうかもよ」

音央「……！」

その時。

外からサイレンが鳴り響く。

目だけで、音の方をギロリと見る佐竹。

佐竹「（イラついた様子で）……黙っとけって言ったのに。これだからガキは」

佐竹、視線を音央に戻し、

持っていた鉄パイプを振り上げる。

音央「……ッ」

リイを庇い、ギュッと目をつぶる音央。

鉄パイプが振り下ろされる寸前、入り口から警察隊が突入。

佐竹「……（舌打ち）」

佐竹、鉄パイプを放り出し、そのまま部屋の奥にある扉へ逃走。

警官隊がその後を追う。

部隊長らしき警官（58）が音央に駆け寄る。

警察「君！ 大丈夫か」

音央「はい……でも、俺のアンドロイドが、リイが……」

床に横たわり、動かないリイ。

37〇 警察署・内（早朝）

ももが慌てた様子で駆け込む。

もも「音央！」

ベンチに座る音央に駆け寄り、抱きしめるもも。

もも「……よかった」

音央「……ごめんなさい。俺のせいでリイが。」

（徐々に涙声に）ごめんなさい。ごめんなさい」

もも「ばか。あんな危ない人のところ勝手に行って、相談もしないで。こんなに心配させて……」

先ほどの警官が二人に近寄る。

もも、パッと顔を向ける。

もも「助けていただいて、本当にありがとうございました。それで……この子と一緒にいたアンドロイドは……」

警官「（ためらいつつ）申し訳ありませんが、破損が激しく……。しばらく証拠品としてこちらで預からせていただければと」

もも「（目を伏せて）そうですか……」

警官「お宅の個体は残念でしたが……あの付近では最近アンドロイドの誘拐が頻発していますね。これで一步、摘発に近づきました」

音央、戸惑った顔で警官を見る。

音央「でも、なんであそこが……俺、誰にも

言ってなかったのに」

警官「通報があったんだよ。君の自宅にいる
もう一台のアンドロイドから。持ち主の側
にいるはずの仲間に、異常な衝撃を検知し
たから向かって欲しいって」

もも「（驚いて）メイトが？」

音央「もしかして、あの時……」

× × × ×

（回想フラッシュ）

音央が、家から無理やりリイを連れ出
そうとしている。

メイトに腕を伸ばし、手を繋ぐリイ。

リイ「……お願いします」

× × × ×

警官「息子さんと一緒にいた方のアンドロイ
ドから託されていたんだそうです。（音央に
向かって）自分に何かあったら、君を守つ
てくれ、って」

もも、何かに気がつく。

もも「それって……」

38〇 回想／河野家・居間

10年前の河野家。

眠る音央(3)を見ているもも(38)。

もも「もし。もしね、私が事故に遭ったり、急に倒れたり、もし私に何かあったら……」

ももの言葉をじっと待つリイ。

もも「どうか、音央を守ってね」

39〇 回想戻り／警察署・内(早朝)

もも「……リイ、ありがとう」

もも、顔を覆って泣き出す。

40〇 佐竹の事務所・内(早朝)

立ち入り禁止のテープが張られている。

現場で、床に横たわったままのリイ。

少しだけ目が開く。

41〇 回想／佐竹の事務所(夜)

ケージの前でかがみ込む音央の背中。

佐竹の持った鉄パイプが音央に向かつて振り下ろされようとしている。

リイ「音央さん！」

佐竹と音央の間に飛び入り、音央を上から抱えるような姿勢で守るリイ。
しゃがみ込む音央のつむじが見える。

42〇 回想／河野家・居間

10年前。リイの視点。

膝の上に座る音央（3）のつむじ。

音央、リイの顔を見上げる。

音央「リイ、ずっとそばにいてね」

43〇 回想戻り／佐竹の事務所・内（早朝）

開いていたリイの目が静かに閉じる。

暗転。

44〇 警察署・前（朝）

警察署から出てきた、ももと音央。

並んで、家に向かって歩いていく。

音央「……母さん、ごめんなさい。俺、取り返しのつかないことしちゃった」

もも、俯く音央を見る。

もも「……音央は、ただ直したかったんだよね。リイは、私たちの大事な家族だから」
音央「……」

もも「大丈夫。少し、やり方を間違えただけ」

もも、音央の腕を引き寄せる。

もも「母さんも間違えてた。音央の気持ちを
見ないふりして、焦って勝手に決めて」

俯いていた音央が、ももを見る。

もも「私も音央とやり直したい。家族として、
ちゃんと、話し合いたい。まだ……間に合
うかな」

音央「……（黙って頷く）」

45〇 河野家・居間（朝）

ももと音央が帰ってくる。

メイトが出迎える。

メイト「おかえりなさい」

音央「……ただいま」

食卓には、メイトが作った朝食が並ぶ。

マグカップに味噌汁が入っている。

音央「……なんだよ、これ」

もも「引き継ぎ、間に合わなかったかー」

思わず、笑ってしまうももと音央。

笑顔の二人に合わせるように、「夢はひ

そかに」をハミングしだすメイト。

× × × ×

(回想フラッシュ)

10年前。

もも(38)が眠る音央(5)に歌うのを、

真似をしてハミングするリイ。

× × × ×

もも「そっか。リイは、こっちの方が大切だ

と思ったんだね」

涙ぐむももの肩をさする音央。

46〇 東帝大学・大教室

(T) 5年後・東帝大学

巨大な大学キャンパス。

席に座り、一人コードを組む音央。

友人（18）が近づいていく。

友達「音央！ お前すごいじゃん！」

その声に振り向く音央（18）。

友達「経営学のレポート、教授ベタ褒め。機

械工学も経営学もやるとか体力ありすぎよ」

音央「俺には、この狂った世の中を直しまくるっていう野望があるんでね」

友達「こないだ話してた『修理する権利』っ

てやつ？ 壮大だね。てか、何？ それ」

音央「ん？ ああ……」

音央の手元には、現在のももと音央、メイトの家族写真。

音央「これ母さん。で、これがうちのアンド

ロイドのメイト。それでこっちは……」

ふっと微笑む音央。

幼い音央を抱いたリイの写真。

音央「リイ。みんな俺の家族」

【E N D】